



人物

松阪市

おおたにかへえ
大谷嘉兵衛

大谷嘉兵衛は、明治から昭和初期にかけて、日本茶の普及・発展に貢献した人です。1844（弘化元）年に現在の松阪市飯高町宮本に生まれ、19歳で横浜に出て、製茶問屋に奉公しました。江戸時代の終わりから明治時代の初め、日本は近代化を急ぎ、富国強兵・殖産興業の道を進めており、その資金を稼ぐお茶は、生糸とともに重要な輸出品でした。

1867（慶応3）年、製茶貿易は極めて盛況で、海外からの注文が殺到していました。嘉兵衛は、当時、横浜では製茶輸出の最大の商社であったスミス・ベーカー商会との取引により、巨利を得て間もなく独立し、茶の売込商を開業しました。また、茶の品質向上のためにも努力をしました。

その後、地方議会議員をつとめ、1891（明治24）年には、全国茶業組合中央会議所の議長にもなりました。1899（明治32）年には、日本茶を円滑に輸出できるよう、アメリカの製茶に対する「関税の撤廃」を大統領に面談して要求するなど、日本茶振興に力を注ぎました。その後、貴族院議員に挙げられ、約20年間、茶業界の先頭に立って活躍しました。嘉兵衛はたびたび帰郷し、地元の小学校の建設、松阪港の整備や榎田川に架かる大谷橋の建設など教育・産業文化、交通の整備などを積極的に支援し、郷土松阪の発展に貢献しました。【→P15、50】



大谷嘉兵衛
（松阪市教育委員会提供）

■ 現在、三重県で生産されている茶に関係する産業はどのようなものか、調べてみましょう。

人物

松阪市

もとおりのりなが

本居宣長

本居宣長は、1730(享保15)年5月7日、松阪本町の江戸店持ち商人、小津定利の子供として生まれました。11歳のとき、父が江戸で病気のためなくなり、この後、宣長を含む家族5人は、魚町に移り住みました。商いがあまり得意でなかった宣長は、23歳のとき、母の勧めもあり医者になろうと京都へ旅立ちます。京都では、医学書を読むために、まず儒学を学び、次に医学を学びます。またひとりで、日本の古典や和歌も勉強しました。

28歳で松阪に帰り医者を開業した宣長は、そのかたわら松阪の歌会に参加し、会員たちに『源氏物語』を講義しました。そんな中で宣長は、歌や『源氏物語』が人を感動させる秘密は、人は「もののあはれを知る」心を持っているからだと考えます。「もののあはれ」とは、嬉しいこと、悲しいこと、また四季の移り変わりなど、物の変化に敏感に揺れ動く心をいいます。当時、特に男性は、冷静沈着でなければならないとされていましたが、ここに日本人の心の特徴があると考えた宣長は、それを証明しようと、現存最古の歴史書『古事記』(712年成立)の解説を思い立ちます。ところが、漢字ばかりで書かれた『古事記』は難しく歯が立ちません。自分の勉強不足を痛感する宣長の前に現れたのが、江戸の国学者・賀茂真淵でした。国学とは、日本固有の文化や思想を、古典や歴史、また言葉の研究で明らかにする学問です。【→P21、35】

1763(宝暦13)年5月25日、真淵が泊まっていた松阪の旅館新上屋を訪ねた宣長に、真淵は、『古事記』に注目したことは素晴らしいとほめて、難解なこの本を読むためには、まず『万葉集』から勉強をせよ、学問は基礎が大事だ、と丁寧に説き諭し、わからないことは手紙で質問してくれば答えてあげようと約束してくれます。「松阪の一夜」とよばれるこのただ一度の出会いを機に宣長は真淵の弟子となり、その厳しい指導を受けながら、『古事記』の注釈書『古事記伝』の執筆に取りかかったのです。

『古事記』の冒頭の「天地」という字はどのように読むのか。古代の人は「神」をどんなふう考えていたのか。『古事記』に登場するイルカ、クラゲ、またタニグクとはどんな生きものか。次々に出てくる疑問を一つ一つ丁寧に、時には街道を往き来する旅人の知恵を借りながら、解明していったのです。

努力が実り、『古事記伝』全44巻が完成したのは、69歳の夏でした。執筆開始から35年がたっていました。21世紀になった現在でも本書は、『古事記』を読む時の基本書として、また日本古典研究の方法を確立した書として、高く評価されています。

宣長は、鈴と山桜をこよなく愛しました。研究で疲れたとき、鈴の音を楽しむことで心を癒し、自宅の二階の書斎を鈴屋と名付けました。この建物は松阪市殿町の本居宣長記念館の横に移築されていて、見学することができます。また、山室山にある奥墓には、山桜が植えられています。



本居宣長六十一歳自画自賛像
(本居宣長記念館提供)

【→P111*60】

■ 本居宣長の考え方や作品が、その後の日本に与えた影響を調べてまとめてみましょう。

人物

松阪市

まつうらたけしろう
松浦武四郎

松浦武四郎(1818～1888年)は、幕末の蝦夷地(現在の北海道)を探索した北方探検家としてだけでなく、日本全国を旅した旅行家であり、旅の記録など数多くの著作を残した著述家でもありました。

現在の松阪市小野江町に生まれ、16歳で江戸に出ると、10年間諸国を遊歴し、やがてロシアの南下による北方探検の緊急性を耳にして、蝦夷地の調査に出発します。最初は私人として3回蝦夷地を探検し、そこで暮らすアイヌの人々に案内を頼んで調査する中で、アイヌ語を積極的に勉強し、独自の文化をもつアイヌの人々の理解に努めました。そして、3度の蝦夷地調査を通して、蝦夷地を支配する松前藩や、豊富な海産物に目をつけた商人たちによって、アイヌの人びとが過酷な状況におかれていることを知りました。

その後、今度は幕府の役人として3回蝦夷地を訪れた武四郎は、山や川などの地理や、新しい道を作るためのルートを探るとともに、アイヌ民族の人口が激減している実態を調べ、幕府への報告書の中で、まずやるべきことは、アイヌの人々の命と文化を守ることであると訴えました。武四郎は計6回の探検を行い、150冊を越える調査の記録と巨大な地図を著しました。その中でも特に知られているのが『東西蝦夷山川地理取調図』で、細部にわたる地形や、アイヌの人々から聞き取った地名が約9800も示されています。

また、武四郎は、蝦夷地の詳細な調査記録を著すだけでなく、一般の人々でも読みやすいようにまとめなおし、親んでもらえるよう挿絵をふんだんに使った紀行本を次々と出版しました。地域ごとに出版された蝦夷地の紀行本は、遠く離れた蝦夷地の地理や動植物、アイヌ民族の文化を詳しく伝える上で、大変大きな効果がありました。

武四郎は明治政府箱館府判官事に登用され、さらに開拓使の開拓判官という重要な役職にもついて、蝦夷地を改称する際に、「北加伊道」と提案しました。



武四郎が作った北海道の地図
(松浦武四郎記念館提供)



勾玉で作った首飾りをした武四郎
(松浦武四郎記念館提供)

武四郎が提案した「北加伊道」という名称は、アイヌ民族を指す古い言葉が「カイ」であるという話を、天塩川を調査した際に地元の古老から聞いたことに由来し、北にあるアイヌ民族が暮らす広い大地であるという、先住民族としてアイヌの人々を尊重する思いが込められたものでした。

さらに、郡名や国名(今の支庁名)についても、アイヌ語の地名に基づいた提案をおこなっており、武四郎が「北海道の名付け親」と言われる由来は、ここにあります。

【→P111*53】

- 独自の文化を持つアイヌの人々のことを調べたり、アイヌの人々との接し方や行動からわかる松浦武四郎の思いやりのある心について、話し合ったりしましょう。

史跡

松阪市

たからづか こふん
宝塚古墳

1932（昭和7）年に国史跡の指定を受けた宝塚古墳は、松阪市街地を見おろす丘陵地に位置する、1号墳と2号墳の2基の古墳からなります。1928（昭和3）年におこなった現地調査では、周辺に合わせて88基の古墳があったようです。このうち1・2号墳は規模も大きく、当時の歴史を知る重要な遺跡として国史跡となっています。高度経済成長にともなって開発が進み、現在は古墳群一帯が住宅地に変わり、わずかに1・2・4号墳の3基が残るのみです。

1号墳は、伊勢平野で最大規模の前方後円墳です。古墳の造り出し周辺からは、全国で初の例となる船上に立ち飾りを持つ船形埴輪や、導水・湧水などの表現をした土製品をとまなう冚形埴輪など様々な埴輪類が、2000（平成12）年度の調査で、当時のままの状態で見つかりました。

ここで発見された船形埴輪は現在、松阪市文化財センター「はにわ館」にて保管、展示されています。それは、全長140cm、高さ94cm、最大幅35cmで、今までに発見された船の埴輪では、日本最大級です。船は準構造船といい、丸木の船底に前後左右に板材をたしてかさ上げをして、たくさんの人や荷物が積める古墳時代の大型船をそのまま表しています。

2006（平成18）年に船形埴輪をはじめとする宝塚1号墳出土品271点は、国の重要文化財に指定されました。宝塚古墳と出土品は、松阪の歴史だけではなく、日本全体の古代史を考えていく上で、とても重要なものとなりました。



船形埴輪（松阪市教育委員会提供）

【→P111*54】

- 船形埴輪は、何のために作られたのか調べてみましょう。

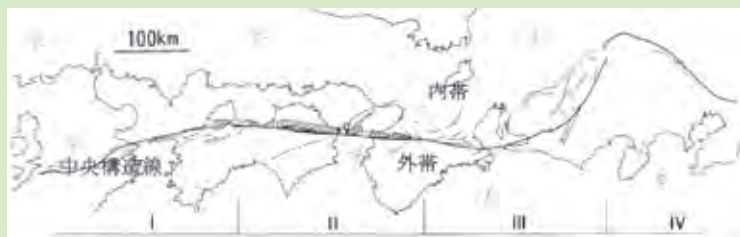
COLUMN
コラムつきで
月出の中央構造線

中央構造線は、関東から九州までの総延長約1000kmにおよぶ日本最大級の断層です。西南日本では、中央構造線をはさんで北側の内帯と南側の外帯の地質が大きく異なっています。中央構造線は、今から約1億年前から活動していると考えられています。その成因は、プレートの沈み込みに起因すると考えられています。三重県内の中央構造線は、現在のところ活断層であるという確実なデータはありません。三重県以外では活断層のところもあります。

三重県内では、鳥羽市答志島の北方、伊勢市、多気町丹生、松阪市飯南町・飯高町を通っています。飯高町月出では、中央構造線の大露頭が見られます。月出の露頭では、内帯側の花こう岩と外帯側の変成岩（三波川変成岩という）がある傾きをもって接しているようすが観察できます。



月出の中央構造線



中央構造線の位置（三重県立博物館提供）

中央構造線を研究することによって、その性格や日本列島の成立のプロセスを追求できるとともに、この露頭は地球のばく大なエネルギーの産物であることを実感できる絶好の場所です。

歴史

松阪市

まつさかもめん
松阪商人と松阪木綿

伊勢商人ともよばれた松阪商人は、大坂、近江と並ぶ日本三大商人のひとつです。16世紀後半から、地元だけでなく大坂、京都、江戸の三都にも店を出し全国へ展開しました。当時、高級生地として流通し始めていた木綿は重要な商品でした。

500年ほど昔、日本で綿花が栽培できるようになると、広々と水はけがよく、肥料にするイワシにも恵まれた伊勢平野では、見渡す限りの綿花が作られたそうです。松阪木綿の特色である藍色を基調としたモダンな縞柄が江戸庶民に好まれたこともあり、たちまちこの地域は日本を代表する木綿産地となり、「松阪木綿」というブランドを確立していきました。

松阪商人の代表的な存在が三井高利です。高利は江戸に呉服店「越後屋」を出し、三井家の基礎を作った人物です。「現金掛け値なし」、反物の切り売りなど革新的な商法を導入して商売を成功させ、やがて幕府の御用達商人となり両替商も営み、その地位を不動のものとししました。市内には他にも豪商の建物が残っています。なかでも有名な長谷川家の邸宅などは江戸時代の生活をしのばせ、小津清左衛門の屋敷は「松阪商人の館」として公開されています。



松阪商人の館 (松阪市教育委員会提供)

【→P111*55】

- 松阪で商業がさかんになった背景を、伊勢神宮の存在や交通路から考えてみましょう。

特産物

松阪市

まつさかうし
松阪牛

「松阪牛」は、高級ブランド牛肉として全国に知られています。その理由の一つ、安全で安心な牛肉であることがあげられます。BSE(牛海綿状脳症)や、産地偽装問題などの被害に対応するために、松阪牛関係者が確かな松阪牛を届ける体制をつくりました。「松阪牛個体識別管理システム」といい、対象となる牛や生産農家の情報を生産から出荷までの間厳しく管理し、スーパーマーケットなどの店頭では、松阪牛シールなどで、情報を確認することができます。生産地域を「松阪市他22市町村(2004年の市町村区域)」とし、牛の種類は黒毛和種で子どもを産んでいない(未経産)めす牛などと決めています。

松阪牛の中でも、特に兵庫県生まれの子牛をこの地域で900日以上の長い間育てたものを「特産松阪牛」としています。生産者は、ビールを与えたり、焼酎でマッサージしたりするなど手塩にかけて育てており、肉質の特徴としては、きめの細かい霜降りや柔らかさ、甘く深みのある香りなどがあげられ、肉の芸術品といわれています。毎年11月には、松阪牛のクイーンを決定する松阪肉牛共進会が開催され、生産者の技巧が披露されています。また、その時に開催されるせり市では、毎年驚くような高い値段がつけられることでも有名です。【→P87】

松阪牛シール
(松阪牛協議会提供)

- 「松阪牛個体識別管理システム」ではどのような情報が集積され、産地偽装を防ぐために役立っているのか、調べてみましょう。